結草
kusamusubi
No.22

Publishing house:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2017.07.01

「末代無智」蓮如上人のお仕事

西照寺住職　日野　賢之

住職の心得

今から二〇〇年ほど前ですね、私の居ります小松のお寺からこちらへ養子に来た方がおるのです。昔ですね。記録に残っておりまして大衆免（だいじゅめ）の浄光寺と。お寺の名前は小さい時から聞かされてきました。数えておったら、その人は亡くなって今年で一九三年目ですかね。ですから今から三、四代前くらいだと思います。私の居ります寺は、だいぶん昔に始まった寺なのですが、どういう訳か一番最初の人が、本願寺八代目の蓮如上人という方のご縁でお坊さんになった。それで蓮如上人が亡くなられてから、京都から加賀の方へ移ってきた。そういうふうに言い伝えられております。ともかく私の居ります寺では、住職は蓮如さんの御文を勉強せないかんと、そういうことを言われておりました。昔住職になりました時に、父親はまだ居ったんですけれどもね、住職の心得としていつも言っておったですね。住職の心得が三つあると言っておりました。

一つは体が空いておるのやったら、お参りの行き先を自分の好き嫌いで選んではならんと。二つ目は衣を着ておる時に人からお聞きした話の具体的な内容はたとえ警察といえども言うてはならんと。三つ目はともかく蓮如さんの御文を勉強せえと。そういうことでした。お寺では毎朝お朝事の時に御文を順番に読んでいくんですけれども、近頃になってようやく少し面白いと思うようになってきました。ですから、こういうご縁にこのことも聞いていただいたらということです。

蓮如上人のお仕事

蓮如上人のお話ですね。文明三年という年です。一四五七年ですか。石川県と福井県の海沿いの境にあります吉崎というところへ蓮如上人五十七歳ですかね、おいでになられます。足かけ五年、吉崎においでになるのですけれども、蓮如上人のなさっていかれた大きいお仕事は大体数えて四つあります。

①名号

一つはね、蓮如上人という方は、実に沢山のお名号を下附したんです。「南無阿弥陀仏」と。大きいがになりますと床の間の掛け軸よりまだ大きいのが残っておりますね。筵（むしろ）の上で書くましたちゅうので字が擦れて斑（まだら）になっておるんでね、虎斑（とらふ）の名号と呼ばれておりますけれども、小さいがなりますと短冊よりももっと小さい、そんな紙にも書かれております。吉崎においでる時も朝起きましてから、お朝事までの間に一〇〇も二〇〇も「南無阿弥陀仏」を書きましたというのです。そんなにたんと書いてどうしましたというとね、会う人会う人に渡しましたというんです。南無阿弥陀仏ですよと。これが一番大事なんですよと。蓮如上人からいただいたということで、気がはるさかい箱に入れて戸棚に片付けた人もおるけども、大方の人は平生、我々が自分が寝起きしておる部屋のどこかに貼っておいたのです。そして朝晩手を合わす。それがお内仏のはじまりですわ。ですから、お内仏は蓮如さんの頃からぼちぼちと始まってきたということですね。

②御文

二つ目はね、蓮如上人は、沢山お手紙をお書きになったということです。蓮如上人からお手紙をもろうました人が、とても大事なことが書いてあるからこれを私たちは御聖教としていただくべきでしょうと申し上げたら、蓮如さんは、御聖教というのは仏さま、お釈迦様、あるいは七高僧の方々、親鸞聖人のお書きになられたものを御聖教と呼んでお敬いするんであって、自分の書いたものなどを御聖教と呼ばれるのはとんでもないことですと。それならばどうお呼びしたらいいですか。その通り「文（ふみ）」と呼んでください。上に「御」の字がついて「御文（おふみ）」ということですね。二五〇通ほど今残っております。実際もっと沢山あったでしょうけどね。昔、手紙を書く場合は、必ず控えを手元に残しまっしゃる。その沢山の控えの中から私たちが今日いただいております五帖八十通という御文を蓮如上人ご自身が選んでいかれた。その内の一帖目から四帖目までは五十八通の御文がお書きになられた順番に並んでおります。一番最初、一帖目の一通というのは、文明三年の七月十五日です。四帖目の十五通目は明応七年の十一月ですね。この時八十四歳です。あくる年、明応八年に八十五歳で亡くなられますから四帖目の十五通目はご遺言というべき御文ですね。この後に五帖目というのが二十二通あるのですけれども、どういう理由やら知らん、五帖目の御文は全部日付が省かれておるんです。最近、五帖目にあります御文の大体三分の二ほどがいつ頃お書きになったのかということがわかってきたんですけれども、それを見ると順番がバラバラですわ。必ずしもお書きになられた順番に並んどらん。恐らく五帖目の一番最初の御文は「末代無智」と始まりますから五帖目全体は、その末代ということを問題にしておられるのかなというふうに思ってもみるのです。

文明三年の七月十五日、これが一番最初の御文です。そして二通目になりますと七月十八日です。これ二つは恐らくね、金沢の二俣においでる時にお書きになったんではないかと。吉崎においでになるのは七月の二十七日ですか。最初の二つは吉崎においでる前になるということです。次の三通目になると文明三年の十二月です。四通目になると文明四年の十一月ですから、吉崎ではあんまり御文を書いておいでにならんということですよ。何でかというと、直にそこに行くましたんですよ。本人が行くさかいにね、手紙いらんですわいね。やがてあっちこっちに色んなお参りの集まりが生まれます。「お講」とこういうておりますけどね。おそらくあっちからもこっちからも蓮如さんに来てくださいとご依頼があったと思うのですけれども、体は一つですさかいに直接行けない。だからその頃から次第に御文が増えていった。

二五〇通ほどあります御文を全部見てみますとね、お手紙ですからお終いのところは大体決まった言葉で終わっておるがです。色んな言葉で終わっております。ごめんごめん、そういう言葉で終わっておる御文もありますし、あら勿体ない南無阿弥陀仏、そういう言葉で終わっておる御文もありますし、尊ぶべし喜ぶべし、そういう言葉で終わっておる御文もありますけれども、ほとんどは「あなかしこ、あなかしこ」です。あの「あなかしこ、あなかしこ」という言葉、これは手紙の決まり言葉です。例えば女の方が手紙を書きまっしゃる時に、「あらあらかしこ」って書くわね。「あなかしこ、あなかしこ」も「あらあらかしこ」も同じことなんです。今の言葉に直すならば、本当なら直接お伺いしてお顔を見て膝を交えて聞いておもらいせんなんことなんですけども、手紙ですみません、およろしゅう、こういうことです。ほらやっぱり、本人が行くのが一番ですからね。そういうことで蓮如上人は沢山の御文を残していかれたということです。

③平等平座

三つ目はね、ずっと後になって、吉崎の後ですけれども、蓮如上人は七十を過ぎてから京都の山科というところで新しい本願寺をお建てになります。その時の本願寺の建物の図面ですね、それを見ると今の私たちは当たり前の間取りだと思っており

ますけれども、大体京都とか奈良の古いお寺に行きますとね、建物の真ん中に仏さんがおるがです。お参りする人はその土間のところで立てってお参りするか、あるいは外のところでお参りするかですわ。蓮如上人は山科本願寺を設計なさる時に、仏さんのおいでる場所をぐぅーっと奥に引っ込めて、お参りの人の居まっしゃる場所を広くしたんです。このお寺はこの柱がちょうど真ん中です。屋根のちょうど下ですさかいに。それよりも皆さんが座りまっしゃる場所の方が広ろうて、しかも高さも一緒なんです。門徒一列平等平座（ひらざ）と。そういう親鸞聖人のお心をそのまんま図面にしましたということですね。これはお寺に来るとこういう間取りですさかいにどこのお寺もこんなもんかと思うけども、真宗以外のお寺に行くとちょっとアレっと思うことありますもんね。ましてや皆んなが入って、一緒に膝を並べて座るちゅう場所があるのは真宗のお寺だけですわ。

　もう一つ面白いのは、三代目覚如上人の時に本願寺というお寺が始まるんですけども、その頃の本願寺は建物がこんな風に並んどったというんですよ。前と後ろです。後ろの方にご本尊、阿弥陀如来がお飾りしてあって、この建物は門主さん以外の人は出入りをしない。お参りする人は、後ろの建物に並んでここからお参りするがです。

　ですから例えばご本尊の右手に親鸞聖人の御影が掛かっております。正面を向いておまっしゃらんのです、阿弥陀さんの方を向いておまっしゃるんです。それからご本尊の左手にある蓮如さんはね、右手を向いておまっしゃろ。正面向いていないのです。というのはここに座っとるお姿なんです。仏さんの方を向いておまっしゃる。

　吉崎別院の蓮如さんは正面を向いていらっしゃるんです。何でですかと吉崎別院の人に聞いたら、全国の遠いところから吉崎にいらした人にね、蓮如上人が「よう来られた、よう来られた」と言うてこれは挨拶しておられるお姿なので、我々の方を向いておられるのですと、そういう説明でしたけれどもね。ともかく、親鸞聖人も蓮如上人も皆んなここに一緒に並んで我々と一緒にお参りしておいでるんやと。

仏さまと真向かい

　私ね、ご本山でお勤めの先生に皆んなの前で叱られたことがある。教師修練の最中でしたがね、「日野さん！ここから見ておりますと合掌なさる時の姿勢が違いますよ。手を合わせた時は仏さんから目を逸（そ）らしてはなりません」と。そういえば、昔習ろうたわ、そんなが。「日野さんの見ておると人差し指が鼻に届きつつありますよ。仏さんから目が逸れてしまうということや」と。仏さんから目を逸らして合掌すると、滅多なことないけどついつい我々ね、どんな気持ちが出てくるかというとね、「お願いします」あるいは良い事あったらあったで「ありがとう」と、そういうことになりかねんということですね。

　手を合わすということは仏さまと真向かいになるということです。こっちから仏さんが見えるということは、逆に言えば仏さんもこっちを見ておまっしゃる。だとするとね、仏さんから見てこの私はどんながに見えておるがやろうかと。私、私と思っておる私と、仏さんがご覧になっておられる私とどっちがということですかね。そういうことを叱られたんでもう忘れられんですね。

　ですから我々はここに並んでおるけれども、仏さんは向こうにおいでになるけれども、ここで決してチーンとしておまっしゃるわけではないんですよ。ほななんやというとね、仏さまの方が我々一人ひとりのところへ、言うならば今お参りしようという気持ちとなってはたらいとってくださる。仏さんにお参りする時は、仏さんのこころでお参りするんです。我々のこころでお参りすると手を合わせた人差し指が鼻の穴へと・・・

　何を思って手を合わすのや。商売繁盛？無病息災？お薬屋さんが商売繁盛をお願いして、我々が無病息災と頼んだら神様はどちらのいうことをききまさるのや。そんなことを考えて見たこともない。人差し指が鼻の穴に入るということはそういうこ

とや。仏さんにお参りする時は、仏さんの心でお参りするんです。だから私たちの中にはお参りしようという心が出てくるとしたら、現に仏さんが私に届いて私のお参りしようという気持ちになってはたらいとってくださる。ですから仏さんはここにおいでるけども、我々一人ひとりのところへ届いておってくださる。それを仏教の古い言葉で、影向（ようごう）、影現（ようげん）という。影がこっち向いてくださる。影が現れてくださると。親鸞聖人のご和讃の中に二度ほど出てきます。

ですからこっちを阿弥陀堂というならば、ここは阿弥陀様が我々に影向してくださる場であるというのでこの建物のことを昔から御影堂と呼ぶ。ご本山へ行くと阿弥陀堂と御影堂と並んでおりますわね。そういうおいわれです。だから建物の建て方、配置そのものがお念仏の教えをちゃんと表してくださっておると、教えに合わせて建てられておると、こういう本願寺ということですね。

④お勤めのはじまり

四つ目の蓮如上人のお仕事ということで言いますと、親鸞聖人の書かれた正信偈とご和讃を印刷したということです。四冊の本になっております。ご和讃三冊、正信偈一冊。ともかく読んで下さいということですね。日本に色んなお寺がある中でご開山といわれる方のお書きになったものを印刷して皆んなに配りましたというのは蓮如さんが初めてですわ。読んで下さいということです。分かっても分からんでも読んで下さいと。毎日読んで下さいと。毎日読んでおればいつかどっかこっかで、ここはこういうことかなと見えてくることがでてきますよと。分かるということはお書きになった親鸞聖人と同じお心になるということです。毎日読んで下さいと。それで朝晩のお勤めということが始まっていくわけですね。我々が真宗のご門徒として勤めておるようなことの大方は蓮如上人の頃から始まっておるということですね。

おぼつかなき次第

文明三年に蓮如上人は吉崎においでになります。一生懸命この辺の一円を歩かれたんですね。そのうちに蓮如上人は色々見えてきた。聞こえてきた。どんなことが聞こえてきかというとね、この辺は蓮如さんがおいでる前から既に「なんまんだぶつ」ということは皆んな知っとりましたというのや。一生懸命にお念仏なさる方が沢山おいでになったというんです。蓮如さんから見ると三代前の方が富山県の井波に大きい別院を建てておいでですね。その後、城端にも別院が出来てた。二俣から福光に出る往来の道があったさかいにね。

「蓮如御影道中」吉崎御坊 2017.4.23

皆んなどんな思いで念仏しておられるか。よう聞いてみると、残念なことに親鸞聖人のおこころとは大分違ごとると。それを昔の人はこういう言い方なさるのです。異義といいます。例えば五帖目の御文さんの十一通目、「御正忌の御文」と呼ばれておる御文さんです。どういうことを書いてあるかというとね、こういう言葉が出てきます。「それ人間に流布してみなひとのこころえたるとおりは、なにの分別もなく、くちにただ称名ばかりをとなえたらば、極楽に往生すべきようにおもえり。それはおおきにおぼつかなき次第なり」と。人間とは人ということではないんですよ。人間界、世の中、世間ということです。この世間に隅々まで広まっておって、誰も彼もが大体どんなふうに心得ておいでになるかというと、なんも思わんでいいのや、ただただ「なんまんだぶつ」と口に言うさえしておれば極楽間違いないと。けどそれはおぼつかないでしょうと。そう思って称えておられるご自身がおぼつかんでしょうと、そういうお言葉がでてきますね。

もう一つは、せっかく蓮如上人からお話を聞いておいでになりなが

ら、自分の都合のええように聞いて、「あら結構やわー」というて喜ぶ人が出てきたというんです。ああ結構や、なんまんだぶつと言うから、どう結構なんやと聞いてみると大体はなんじゃら怪しいですわいね。お参りに回っていても、出てくる話は決まっておるんですわ。九州やそこらで大きな台風でものい目に遭うまっしたけど、それからおもうと本当に小松はええ所やわと言うて。どんなでかい台風が来ても白山が屏風代わりになって、大した被害がないのは本当に仏さんのお陰やわいね、なんまんだぶつと。

昔はそんな人を異安心と言うた。喜んどるかもしらんけど、それは親鸞聖人の喜びと違いますよ。そんなものが見えてきた、聞こえてきたということです。ですから文明五年九月、ひと月の間に蓮如上人は十二通もの御文を書いておまっしゃるんです。殆どが、そういう異安心ということを念頭に置いてお書きになっていかれた御文さんです。一帖目の御文は十五通あるんですけれども、その内半分以上の御文は文明五年九月のひと月の間にお書きになった御文さんですわ。親鸞聖人のお念仏のおこころを皆さんにきちっと心得ていただかねばとは思うても体は一つですさかいに、そこらじゅう出かけるわけにはいかない。そうかといってそれなら御文にすればいいかというと恐らくその頃わね、今と大分違いましてね、この国に住んでいる人の半分かもっとの人たちは自分で字を書いたり、自分で字を読むということをなさらなんだ。そういう時代ですね。ですから誰か字を読むことのできる人が読むのを聞いて、憶えてくださいと。そのためには長い御文では駄目ですさかいに、初めから短い御文にしますから、聞いて憶えてくださいということでお作りになったのが五帖目の一番最初の「末代無智」という御文さんです。

京都のご本山に行きますとね、前のご門主さんのご命日は十三日ですから大逮夜からお参りが始まるんですけどね、毎月十二日のご本山で拝読される御文は必ず「末代無智」ですわ。月参りでもよく読まれますが憶えてますか。憶えるというても耳から憶えるのですわ。御聖教の拝読というのは必ず目で見て声に出して耳で聞く。この三つが揃って初めて拝読というんです。黙って読んでは駄目なんですわ。聞こえるようにということです。

私の家内は富山の黒部というところから来たんです。お百姓の家ですわ。九十四歳までおいでたおばあちゃんがおりました。懇ろな人でね、六時過ぎからお内仏の前でお勤めが始まるんです。私もおばあちゃんの後ろに座っておったんですがね、ゆっくりとゆっくりのお勤めながです。終わるとでかい御文の本を出してきて、広げて読みまっしゃるんです。そのおばあちゃんが亡くなるまで知らんかったんやけどね、字を読めん人やったです。このおばあちゃんは五帖目の御文がみんな頭の中にはいっておるのですよ。「一念発起入正定之聚とも釈し・・・」（十通目）とちゃんとめくっておる。あらー負けたと思ったね。

時と所

蓮如上人は短いものにしますからどうぞ読まれる人のを聞いて憶えてくださいということでお作りになられたのが「末代無智」の御文です。ですからね、短い御文になさるために蓮如上人は独特のやり方をなさるがです。どんなやり方かというたらね、省略するんです。例えば文章というのは、言葉が並んで文章ができますわね。なになには、なになにで、なになにだから、なになにですと。これで文章になるんですけれども蓮如上人はね、省略して言葉を抜いてしまうんです。例えば、最初に「末代無智」とありますね。もうここに言葉を一つ抜いてあるがです。他の御文を見ると出てきます。「末代濁世」あるいは「末代悪世」と。省いて、省いて、省いて短くする。こういうやり方ですね。「末代」、これは時を表わす言葉ですわね。「濁世」、これは所を表わす言葉です。御聖教の中で時と所というもんが二つ一緒に出てくる時は、それは縁というのです。時という縁、所という縁ですわ。我々を動かしとる一番強い力を持っておるものを縁というのです。正信偈の中に時と所という字が並んで出てく

るところがあります。「法蔵菩薩因位時　在世自在王仏所」と、ちゃんと出てくるね。皆さん、こうやってお寺にお参りにおいでになるでしょう。何でお寺にお参りなるんですかとお聞きしたら、ひょっとしたら一人ひとりは違うかもしらん。そらもうお参りいかないかんわいねってという人もおられれば、人に誘われたからとか、今日は昼から面白いテレビないさけとか、色々あるかもしらんけどね。けど皆んなに共通していえること、誰もがそうやなとしか言いようのない皆んなに共通していえることはなんやといったらね、お参りする時が来たんですわ。私という人間の人生の中で色んなことをしとるけども、お参りする時が始まったということです。そういう縁ですわね。そんなら、お参りする時が来たさかいといって、金沢駅の待合室へ行けばいいかといったら、そんなわけにいかんがですわね。いつどの人にその時が来てもいいようにということで我々の親たちがこうやってお参りの場をこしらえて大事に守って、大事に続けてくださるということですね。時と所ですね。

「無智」

「無智」というたらこっちの「知」なら何も知りませんということですね。そうでないんで智慧の「智」ですさかい気がつく、気がつかんということです。こっちの「知」なら知らんということです。でも何も知らんがやないです。色んなこと知っとるがです。ようけ知っとるわ。知らんでいいことまで知っておるね。いろんなことを知っておるけども、本当に大事なことを今まで知らなんだということに気がつかんことを無智というのですよ。何で気がつかん？いろんなこと知っておるさかいです。修行が足らんと思っておるがです。そんながやないがです。知って助かるがないです。気がつくということが目が覚めるということですさかいに。そういうところからこの御文が始まっていきます。

「こころをひとつにして」

「末代無智の在家止住の男女たらんともがらは」、「たらん」というのは男女となれるということですね。「こころをひとつにして、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、さらに余のかたへこころをふらず、一心一向に、仏たすけたまえともうさん衆生をば、たとい罪業は深重なりとも、かならず弥陀如来はすくいましますべし」。これ順番に書いてあるけども、時間的に順番ではないんです。心を一つにするということも、阿弥陀仏を深くたのむということも、世の方へ心をふらないということも、一心一向に仏たすけたまえともうすことも、同じことをおっしゃるんです。同じことをこっちから見たりあっちから見たりしておっしゃるんで、時は一緒なんです。順番をおっしゃるんじゃないんです。どの御文をいただいていく場合でも大事なことです。言葉、時が同じやからといって一遍にしゃべれるかというても喋れんがです。そういうところ気をつけなあかんね。

「こころをひとつにして」、これね、「在家止住の男女たらんともがらは」とありますから、沢山の人が心を合わせましょうとそういう言葉についとられがちなんですけども、そんなことでないんです。なんでかというと、人間の心といったら、そんな理屈なもんでないんですわ。

お釈迦様がお説きになられた教えの中で人間の心ってどんなもんやということについて細かくおっしゃっていかれた教え、、法相唯識（ほっそうゆいしき）というんです。そういう教えがあるんです。これは随分早くに日本の国に伝わってきております。奈良に行きますと、法隆寺というお寺があります。薬師寺、興福寺というお寺、みんな法相唯識のお勉強のお寺ですわ。京都ではね、清水寺が法相唯識のお寺ですわ。人間の心とはどんなもんやというんです。

天親菩薩がお書きになったものを見ていきますと、こういうことが出てくるがです。人間の心は三つ印があるというんです。例えばガラスの金魚鉢の中に色の違う電気の球がいっぱい入っとるとするわ。皆んな色が違うのです。ひとつひとつが人間の心なんです。いくつあるんかね。

一番目、人は一遍に一つのことしか思いませんというのです。楽しい

時は楽しいという電気だけ点くんですよ。もしここで赤い電気が点けばね、あとは点かんのですさかいに全部が赤色になりますわね。青いの点けば全部が青くなる。二つ一緒に点いて紫にならんがかというとちゃんと紫の電気もあるがです。そういうことで一遍に一つのことだけを思うのです。楽しい時は楽しいという心、悲しい時は悲しい心、二つ一遍に起きんね。腹立つということあるやろ、むかーっとなるとね、損も得もないんやわ。何するかというたら、手元にある茶碗を投げるんやわ。コノヤローと。だいたい当たらんように投げとるけどね。投げたらそこら辺に落ちてパリーンと割れるやろ。割れた時には腹たった心がどっかいってしもうてあらーと思ってなる。もし腹立つ心と損得の心が同時に起こっておるならば、茶碗投げんわね。一遍に一つだけ思うというんですよ。

二つ目、今思ったことはすぐ消えるんですと。パッと消えるんやと。そんなことない、同じことをずーっと思っておるんやないかというけど、それはその次にまた前と同じ電気が点くんで、よう見ると点いたり消えたりしとるというんです。その心がパッと起きる時間、パッと消えていく時間をお釈迦様の国の人たちは刹那（せつな）という言葉で表現するがです。短い時間という意味ですね。ぱったぱっぱと。パッと思ってパッと消えるというんです。

三つ目。次に何を思うか前もって決めれんのですと。赤い電気点けたいなとか、青い電気点けたいなとか思うことがあったとしても、その通りになるかならないか全く分からんがです。次という時が来るまで。次何を思うかということを前もって決めれるかね。今から死ぬまで腹立てんとこうとかね、何があっても嫌なこと思わんとことか、何があっても喜ぶことにしようとか決めておけばいいんですよ。決めたということと決まるということと関係ないですわ。ご縁のもんですわね。そういう人間の心が皆んなで同じことを思いましょうということは絶対に出来んということです。

「こころをひとつにして」というのはそういうことではなしに、この場合の一つというのは、赤ちゃんの顔をみて、「あらー可愛らっしゃー」というて、横にお母さんがおればお母さんと一つやといわんなん。横におじじがおればあらー元気な顔、おじじと一つやといわんなん。別におじじが寝ておるわけではないがや。赤ちゃんの顔とおじじの顔と並べてみて、ぴたーっと合わさる、それが一つという合わさり方です。ということは「こころをひとつにして」ということは我々の心と、もう一つの心がぴたーっと合わさるということです。それは何の心やというと、簡単にいうと仏さんの心ですわいね。さっき言いましたように、我々がお参りするのは仏さんの心でお参りするんです。合わさったからですわいね。

ねてもさめても

時々お参りいらっしゃるおばあちゃんが困った顔をして聞きまっしゃるのですわ。お勤めの後に御文さんを読んでおったら、日曜日やったんで家にいた小さい孫にこう言われたと。ばあちゃん、さっきから聞いてると「ねてもさめても、いのちのあらんかぎり」というけども覚めとる時は「なまんだぶつ」言えるかもしれんけども寝とる時はどうなるんや。寝言で言うがかとそんな生意気なことを聞くがやと。ばあちゃん、どう返事したんかと聞くとウニャウニャウニャと帰ってきたと。

阿弥陀経というお経があります。こういう言葉が出てきます。「若一日、若二日・・・・若七日」と。七という数字はいっぱいという意味ですわ。いっぱい、いっぱいにお念仏するならば、一生懸命ということですね。続いて「一心不乱、其人臨命終時（ごにんりんみょうじゅうじ）、阿弥陀仏、與諸聖聚（よしょしょうじゅ）、現在其前（げんざいごぜん）、心不顛倒（しんぶてんどう）」という言葉が出てきます。「心不顛倒」と一生懸命

に一心不乱にいっぱいいっぱいに常日頃お念仏なさるならば、その人は「臨命終時」・・・

臨命終時

この四つの漢字をどのように読んできたかというと、法然上人のちょっと前ぐらいまでは、「命終の時に臨んで」と、命終の時ですさかいに、命が終わる時です。常日頃、一生懸命お念仏しておるならば、その人がいよいよ命が終わる時になって、阿弥陀さんは他の観音さんやら沢山のお仲間たちとその人の前においでになるんやと。だから心が顛倒、心がむたむたになることはありませんと。そういうふうに読んできたんで、ここから出てくる話を臨終来迎というんです。いよいよ終わるぞという時になると阿弥陀さんがお仲間を連れてお迎えにおいでるというんです。そんな絵あるわ。掛け軸になっておるね。来ればいいけど、来なんだらどうするが。どうするかといったら、後に残った者で来たことにしておるんですわ。多分来たやろ、いや来たのに違いないと。来たに決まっておると。なんの当もないがです。

日本で一番歴史上でお金持ちやった人は、藤原道長というお公家さんですわ。自分用のでかい、でかいお内仏をこしらえたんですわ。宇治の平等院ですね。金ピカの阿弥陀さんを造りまして五本の指のところから色の違う紐を五本ずっと伸ばしてこうやって持って泣いておったというんです。たのむこっちゃお迎えに来てと言って泣きながら死んでいったというんですよ。要するに命終の時でないとお出ましにならんがですさかいに、頼んこっちゃ来てくださいと、こんなが仏法ではないがです。

では法然上人や親鸞聖人はこの四つの漢字をどんながに読まれたというと、「命終に臨む時まで」と。御文でいうと、寝ても覚めてもいのちのあらんかぎりは阿弥陀仏はその前においでになるんやぞと。どうやっておいでになるかというとなんまんだぶつ、お念仏となってちゃんと私のところに届いとってくださる。この御文のおこころははこういうことですね。阿弥陀経のところからいただいておられるということですね。短い御文ですけどもまだまだいっぱいいただいていかんなんことはあろうかなということですね。

念仏往生の願

もう一つ、「これすなわち第十八の念仏往生の誓願のこころなり」と。こういうお言葉が出てきます。お経に出てくる四十八願の第十八番目のご本願を色んな人が色んな名前を付けたんです。親鸞聖人はどんなお名前を付けましたかというとね、正信偈にもありますでしょ、至心信楽（ししんしんぎょう）の願と。第十八願を念仏往生の願という名前を付けましたのは、法然上人なんです。蓮如上人はわざわざここで親鸞聖人でなしに法然上人のお付けになったお名前を残していくましたということですね。これはさっき言いいました「末代無智」の御文もそうですけどね、御文の中に流れという漢字がいくつか出てくるんです。「一流」という言葉と「当流」という言葉です。法然上人がおいでになって、色んなお弟子の人がおいでになったんです。その中で親鸞聖人がいただいてこられたおこころを蓮如さんは「当流」と。他は九品、鎮西、西山、長楽寺、今日で言う浄土宗のご宗旨の方々ですね。それらを当流に対して他流と。ほな「一流」とは何かというと、親鸞聖人もその流れにあわれたし、法然上人もその流れにあわれたし、善導大師もあるいは天親菩薩も龍樹菩薩ももっというとお釈迦様もこの流れに会うていかれた、それを聖人一流。どうぞ御文をじっくりひとつお読みになってみてください。どうもありがとうございました。なんまんだぶつ、なんまんだぶつ。

《編集後記》

◇本文は平成二八年十月十七日、浄光寺「報恩講」大逮夜の法話録であります。洵（まこと）に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

＊「追弔会」のご案内＊

日時　八月十三日（日）午前十時～

講師　菅原貴之師（滋賀県竜王・真宗仏光寺派円覚寺住職）

お誘いあわせお参り下さい。

◎お知らせ

ホームページがあたらしくなりました。フェイスブックをはじめました。是非ご覧ください。